

浄土

monthly
JÔDO

1998 August

8





テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

高山市指定重要文化財の大雄寺山門

大雄寺

寺院紀行

高山市指定重要文化財の大雄寺山門

大雄寺

寺院紀行

高山市指定重要文化財の大雄寺山門

大雄寺

寺院紀行

高山市指定重要文化財の大雄寺山門

大雄寺

寺院紀行

飛騨高山
大雄寺

古い町並が残る高山市内の三町



大雄寺本尊

日本一大きい徳本上人名号石



徳本上人の頭陀袋とお袈裟



大雄寺本堂と客殿(右)

宮川沿いに並ぶ朝市



高山祭りの主役となる屋台

大雄寺第二十九世田中玄了住職



浄土

1998/8月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「大雄寺」	写真=タカオカ邦彦	3
生かされて生きる	家島万里子	8
選択集絵解き物語	大室了皓	15
寺院紀行 飛騨高山大雄寺	真山 剛	24
表紙は語る	川井 聡	33
連載 選択集を拝む(二)	須藤隆仙	34
連載 身障者から学ぶ	高木悦男	42
御法語に聴く	袖山栄輝	48
コラム		53
連載 無明抄	秦 恒平	54
Jフォーラム		66
事務局便り		62
編集後記		70



表紙題字=浄土門主 中村康隆現下
 表紙撮影=川井 聡
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

法然上人と私

生かさされて
生きる

家島万里子

涅槃会ねはんえのころ、知り合いからその御主人の死を告げるお電話を頂きました。その時、「主

人はこれまで家長として、お寺様とのお付き合いはありましたが、信仰心を持っておりませんでした。ところが、死期を悟りました時、死ぬことが怖いと言いましたので、主人にお念佛を勧めました。……そして、とても安らかな最期でした。」とお聞きして私は「御主人様は間違いなく、お浄土へ往かれたことでしょう。」と言いました。

人は若くて意気軒昂な時に、自分の死を考えることは少ないようです。しかし、生を受けて死を免れる人はなく、速いか遅いかの違いはあっても、必ず死なねばなりません。それに、何処で死ぬかわからず、臨終（まだ息のある時）にお念仏を勧めて下さる善知識に会えるという保障はどこにもありません。

その上、法然上人が『一紙小消息』の中で「受け難き人身を受けて」と述べておられるように、この世に人として生を受けることは有難いことです。まして、佛法流布の世に生まれることは難しく、この度の生を逃せば、いつまた人界に生まれることができてしまうか。これと思うと、平素から自分の死と向きあつて、死して後、帰るべきところを定めて生きることが大事に思えるのです。

そして、周りに目を向けると、人がお念佛（信仰）に導かれる佛縁・機縁は様々で、子供の頃に導かれる人、大人になって導かれる人、命終の時に臨んで初めて導かれる人、そして、全くお念佛と縁のない人などさまざまあります。これは、阿弥陀様の慈悲は全ての人に注がれているのですが、人によって、その事に気づく（機が熟す）時期に違いがあ

るために、このような異なりが生じるように思います。

私の場合は、七歳の時、母との死別を機縁として、父の勧めで念佛に導かれました。

これは、子供の永遠の幸福を願う親心であつたと思います。それ故、父は私のために「釈尊の一代記」や「法然上人の御生涯」等を、まるで童話でも聞かせるように話をしてくれました。それを聞きながら、子供心に、親と死別するのは私一人ではないことや、残された父や私もいつかは死ぬということ等がわかりましたので、極楽浄土に生まれたいと願い、母との再会を信じて念佛に励みました。

また、父は折にふれて私に『一紙小消息』や『一枚起請文』等を拝読して聞かせ、かみくだいて話をしてくれましたので、次第に念佛の大切さが心の中に浸透していきました。私に語る父の知識の源泉が法然上人の教えであることは後になってわかるのですが、これが法然上人との最初の出会いでした。

初めは、父を介して出会った法然上人でしたが、成長するにつれて自ら進んで御法語などにふれるようになりました。中でも興味を覚えたのは『和字選択集』で、これによって多くのことを学んだような気がします。

年月が流れ、私に念佛を勧め、自らも金剛の信を貫いた父が「お念佛を忘れるな」という言葉を遺して極楽浄土へ帰りました。その見事な最期を目のあたりにして、私は前にも増してお念佛をするようになりました。

そして今では、法然上人の御法語などを拝読するたびに、時空を越えて面前にあるかの

ように、一つ一つの言葉が私の心に生き生きと響き、導かれていることを実感致します。

その中で、特に心を引かれるのは、御法語や御消息（お手紙）等の中から、そこはかとなく伝わってくる芳しい香にも似た法然上人の人柄です。弟子はもとより、在家の人々に対する慈愛に満ちた態度や細やかな配慮、師としての器量の大きさ、懐の深さ、そして、智恵第一と言われたその指導力など、何を取りあげても素晴らしいの一語に尽きます。

このように、慈悲深く、現行一致、内外相應した円満な人格にふれる時、私はいつも

阿弥陀佛に あみだぶつ そむる心の 色にいてば

秋のこずえの たぐいならまし

（大意）阿弥陀様の本願を信じてお念佛するうちに染まる心が外に現われたならば、秋の野山を彩る紅葉のようであるだろう。」という法然上人のお歌を思い出します。

この御詠歌の中で、秋の紅葉のようだと言われる「阿弥陀佛に染むる心」というのは、私達のお念佛の声に應えて下さる阿弥陀様の光明に照らされて、私達の心が育てられ、知らず知らずのうちに変わり、次第に熟（み）つていく心のことで、紅葉の色が見る人に暖かさを感じさせるように、人を思いやる暖かい心、阿弥陀様の心を移したような心（慈悲深い心）であると思います。

これは、極楽浄土へ往生することを願って称えるお念佛（自行）が、自分を利益する自利だけにとどまらず、阿弥陀様のお育てによって、他者を利益する利他の心が自然に生じて、だんだん染まっていくのです。

それでは、この心は外に現れないのでしょうか。世間では「心ばえのよい人は、内面の美しさが顔や言葉や態度に現れる」と言われておりますが、お念仏によって培われた心もまた自然に外に滲み出て参ります。

このことを身をもってお示し下さっているのが法然上人で、お念佛一行の専修に於て、阿弥陀様の慈悲の心を自らの上に体现された法然上人の生き方や人々に対する態度は、正に慈悲の実践であると思います。

これを現代的に言うと、お互いに愛しい・信じあい・助けあい・喜びあい・共に生かされて生きる「共生」ではないでしょうか。

私は、法然上人の有様こそ、念佛者が阿弥陀様によって人としてあるべきすがたにお育て頂けるという証であり、そこに念佛者の究極のすがたを見るのです。そして私は、法然上人の生き方や人々に対する態度から「真実の念佛者は他者に対して慈悲深い」ということを教えて頂いたのです。それ故、往生を願ってお念佛をする私にとって法然上人は、敬慕してやまぬ導きの師であり、鑑なのです。

今日の殺伐とした世相を見るにつけても、法然上人の教えに導かれ、お念佛を称える人が一人でも多くなつて、それぞれの心に慈悲の心が育まれたら、世の中は、もっと明るく和やかになると思います。

それ故、私は、法然上人の教えにしたがい、阿弥陀様の本願を信じて、ひたすらお念佛を称えて浄土に続く白道を歩み、有縁の人には分け隔てなく、暖かくやさしく接し、それ

それぞれの求めに応じて自ら信じる教えを語り、そして、無縁の人には、この度の生を終えて極楽浄土へ往生させて頂いた後、この生死の世界に還って来て、無縁であった人の親となり子となって、あるいは師となり弟子となって、お念佛を勧めて極楽浄土へ導きたいと願わずにはいられないのです。

そして今、自分の境涯をふりかえってみると、私を慈しみ育ててくれた父母や継母、そして、縁の深い人は皆、私一人を導くために、阿弥陀様の意を体して浄土から還来された菩薩の示現かと思ひ、子供の頃から私の心を耕し続けてお育て頂いた法然上人は、私に「速く浄土に帰っておいで」と呼びかけて下さる阿弥陀様のように思えるのです。

おかげ様で私は、阿弥陀様の光明に包まれて、すべての人に支えられ、生かされて生きています。これを喜びと言わずに何を喜びと言うのでしょうか。人界に生を受けた本懐ここにあり」と、今日もよろこびの中で南無阿弥陀仏・なむあみだぶつ……

光明遍照十方世界念佛衆生摂取不捨 合掌

ただたのため すべての人が すくわるる

祖師のみおしえ 南無阿弥陀佛

往生は 弥陀にまかせて やすらかに
現世を生きる 南無阿弥陀佛

無量寿経の 光明ひかりの中に 生かされて
生きるよろこび 南無阿弥陀佛

(家島万里子作『南無阿弥陀佛のいろは歌』より)

いえしまりこ

昭和十八年生まれ・京都市在住

平成四年 佛教大学通信教育部・文学部佛教学科(浄土学)卒業

若い頃は、保護司をしていた父の影響を受けて、非行少年の良き相

談相手・友人となつて立直りを助ける「ビッグブラザーズ エン

ド シスターズ ムーブメント(BBS運動)」に参加して活動し、

現在は、地域の社会福祉委員として、お年寄りといふれあいながら、
お互いに支えあえる住みやすい地域づくりを目指す在家の念佛者。

連載

選沢集十六章之図

正徳甲午季冬近州蒲生日野
高田敬輔題於平安旅寓

その三・第九、十二章

大室了皓

選沢集絵解き物語

選沢本願念仏集は難解な書物であるといわれる。

この絵解き選沢集は

それをわかりやすく説明しようとしたもので、

古来より種々の流布がみられる。

ここでは正徳年間の十六章の図を取り上げてみた。

第九章 念仏する人の宗教生活

次のように念仏生活を送りなさいと、説かれています。四つあります。

一、阿弥陀様や浄土の菩薩様を、己をむなしくして敬い礼拝する。(恭敬修)

二、他の行をせず、専ら阿弥陀様の名を称え、念じ礼拝する。(無余修)

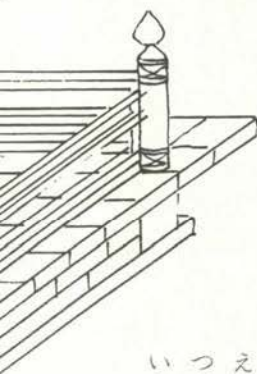
三、右の二つを絶え間なく。(無間修)

そして貪り・怒りなどの煩惱が入り込まないように努める。もし入り込んで罪を犯すようなことがあつたら、すぐ懺悔して常に清らかな心を保つように努める。

四、右の三つを、よく守って一生涯をおわるまで続けることを誓い。決して中止しない。(長時修)

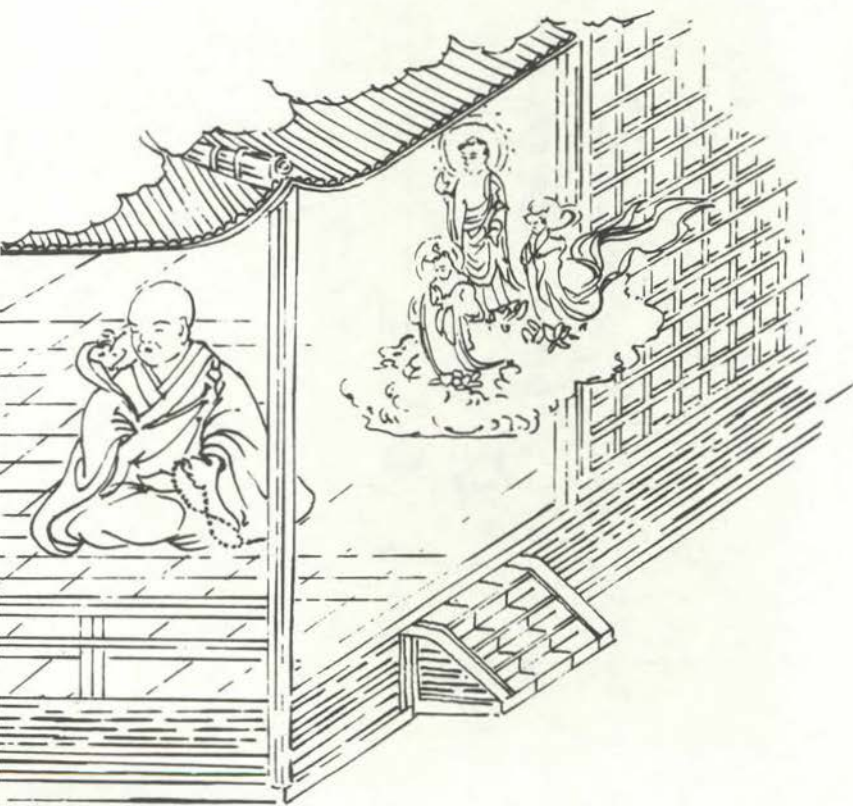
この絵には三人の人がいます。

手前の小さい人は拜んでいます。次の大人のような人は、頭を下げて一心にお念仏を称えています。一番右の人はお坊さんです。四つのできるように、二人をリードしているようです。





第十章 お念仏することをお讃えになる



観無量寿経には、

「長い間、数々の重い罪を犯した人でも、お念仏を称えたので、阿弥陀様は観音菩薩や勢至菩薩と共に、救いのお姿をその人の前にあらわされ、『極楽浄土の障りや罪は全て滅した。われ来たつて汝を迎える』とお念仏を讃えられた」と説かれています。



この絵には、如意を持ったお坊さんが、この教えを左の人に説いています。その教えに従ってこの人はお念仏を称えました。

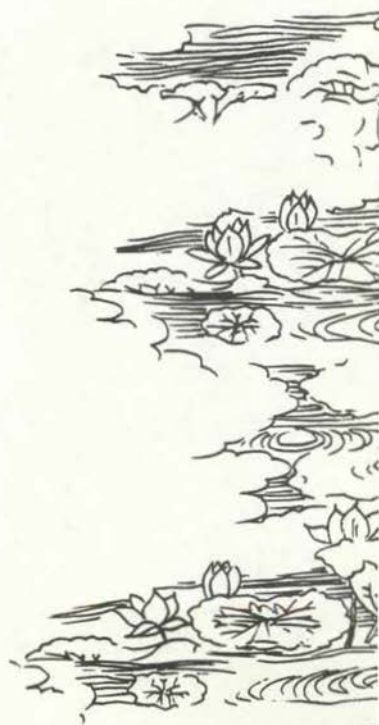
すると、お経に違わず阿弥陀様と観音菩薩・勢至菩薩が雲に乗って即座においてになり、お念仏をお讃えになっていることが描かれています。



第十一章 お念仏する人をお讃えになる

この絵を見ると、お坊さんや在家の人達五人が、蓮池に向かつて拝んでいます。何を表しているのでしょうか。

観無量寿経には、お念仏する人は人間の中でも、白蓮の華のように香り高く勝れた人である。そして観音勢至の二菩薩が親しい友となつて、この人を見守つて下さる。だから末は浄土に往生して、やがては仏の悟りにまで進むことができる、と説かれています。



白蓮の華は、好ましい華、希にある華、最上の華です。

念仏する人もこれと同じように、人間の中の上上の勝るもののない人だと、阿弥陀様が讃えておられるのです。

この絵の蓮池には、蓮の華がいくつも咲いています。念仏する人は白い蓮の華のように勝れているのだ、ということを表しているのです。



第十二章 「南無阿弥陀仏」と称えることだけをお授けになった。

お釈迦様は高弟の阿難様に、阿弥陀様のおん名を後の世まで伝えるように、託されました。観無量寿経には、心を統一して阿弥陀様や極楽に思いをこらす十三の行をあげて、その一つでも能力に従って勤めれば、往生の要因となると説かれています。(定善十三観)

また世間的ないろいろの善事(親孝行などをはじめとして)と、仏教で定められた生活の規律などさまざまな宗教的善事を、通常の心のままで勤める事も説かれ、それらも往生の要因となるとされています。(散善)

しかしながら、

「これらの行は罪深い我々の能力にあわな
ばかりでなく、濁りに満ちた末法の世には相

応しくない行である。

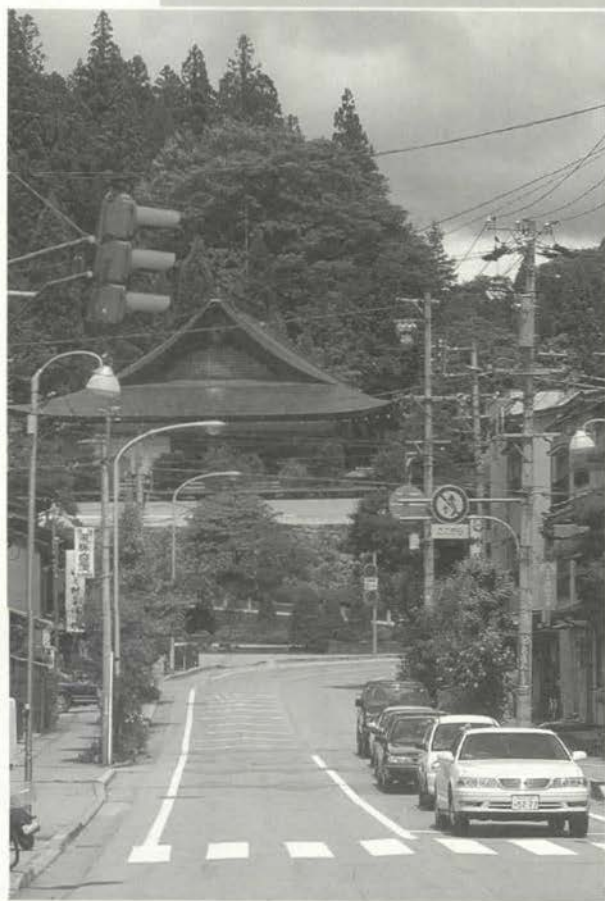
ところが念仏の行と浄土往生の教えは、われわれの能力に適い、末の世にもびつたりと合っている。念仏は他の行と比べてもつと勝れている。しかも念仏には全ての功德が含まれている」

というわけで、お念仏だけをお授けになったのです。

この絵では、お釈迦様が阿難様に向かってねんごろにお念仏をお授けになっており、回りには多くのお弟子さんが一緒にこれを聞いている様子が描かれています。

飛驒高山
大雄寺

寺院紀行



撮影／タカオカ邦彦

文／真山剛

大雄寺は宮川通りの突き当たりにたたずむ

昭和四十四年一月二八日、飛驒高山の名刹、香莊嚴院東林山^{だいりやう}大雄寺の本堂から出火した。これは大變だと近所の寺々、民家から人々が駆けつける。しかし、すでに手をほどく術もなく、遠巻きに見守るしかない。高山の町を一望する小高い丘にそびえ続けた歴史ある伽藍が崩れさうとしている。堂内に火が回り、ついに本堂の屋根が落ちる。と、その瞬間中央から一筋の火の手が上がった。

天に向かって伸びたその炎を見て、集まった人々は一斉に驚きの声を上げる。大雄寺の本堂から上がった火の手はあたかも立ち姿の仏像そのものではないか

その瞬間の写真が残っている。この写真の火柱を仏像と見るか否かは、読者に委ねる。が、信仰心の篤い高山の人々にとって、京都にちなみ東山と名付けられた山麓に伽藍を並べる仏教諸宗派の寺々は心のより所であり、その東山で最も歴史ある大雄寺の本堂炎上である。奇瑞が起きても不思議ではない。

さて、大雄寺が現在の地に移ったのは天正十四（一五八六）。十三世紀頃に法然上人の弟子の証空上人が吉城郡上広瀬（現在地より北に六キロ程の地）に開いたといわれる金澤山大雄寺は、時の飛驒領主、金森長近の命でこの地に移転する。移転の理由を第二十九世田中玄了住職がこう語る。

「眼病にかかった長近を治した京の薬師、堀安信が長近の褒美に何

昭和四十四年本堂火災での火柱



でもとらそうという言葉に、自分は法然上人の念仏を信じる者だからこの地に念仏の声の聞こえる道場を建てて欲しい、と答えたのがきっかけで、大雄寺は上広瀬からこの高山へと移転し、浄土宗の寺院となったのです。

当時、高山には国分寺や天照寺などはあったものの、住職のいる寺は少なく、移転当時の大雄寺はとても大きく、東山一帯からさらに東側にかけて相当の広さの寺領だったようです。

大雄寺の移転の翌年、現在は浄土真宗大谷派の別院となっている光曜山照蓮寺もこの高山へ移転してきた。もともと照蓮寺は飛驒の浄土真宗の中心の寺として、合掌造りで有名な白川郷に建立されたこの照蓮寺も長近によって移転し、高山の城下町形成に大きな役割を果たすことになる。

そして、東山の太雄寺、町中の照蓮羅、と現在の高山を代表する二つの寺院がそろったのである。

その後、金森一族の菩提寺や関係の諸寺院がこの東山の太雄寺の寺領に移転してきたり、建立されたりして現在の東山の寺町となっている。

十数カ寺が並ぶ寺町は、どのガイドブックにも載っていて、東山遊歩道散策コースとして観光客の人気を集めている。

このように高山の寺院の歴史は金森長近の国作りと密接な関係を



本堂から高山の町並みを望む

持っている。そして、それは高山の歴史とも結び付くが、まず観光地飛驒高山を見てみよう。

飛驒高山を全国的に有名にしたのは、昭和四十五年の国鉄の「デイスカパー・ジャパン」である。この時のキャッチフレーズ「日本人の心のふるさと飛驒高山」は、それまでの日本アルプスの入り口としての飛驒高山を一変させ、今では年間数百万人の観光客が訪れる日本を代表する観光地にしたのである。

確かに、動く陽明門と呼ばれる見事な屋台を曳く、春秋の高山祭りを始め、日本で唯一残る江戸幕府の群代所である高山陣屋、造り酒屋や紅殻格子の古い家並みが三筋も残っている三町、銘木の産地ならではの家具や一位一辺彫(彫り物)、そして春慶塗、さらに一年中開かれる朝市と訪れる観光客を飽きさせることはない。

その上、昨年の秋には、難所だった安房峠に安房トンネルが開通、西の京都・福井、南の名古屋、北の富山に加え、東の長野と関東方面からの足回りもぐっと良くなったのである。

高山の町を歩いてみて感じたが、町自体かなり広いにもかかわらず町中いたるところが観光地なのである。地図でみれば、歩いて回るには少々広い町だが、実際に歩いてみると、ところどころに名所旧跡があり、距離を感じさせない。土産物屋や地元の名物を食べさせる店もうまい具合にましまりつつも、散らばっている。

高山でもっとも古い国分寺。
左の山門奥が本堂



日本に唯一残る江戸幕府の郡代所である高山陣屋

大雄寺の鐘



大雄寺墓地にある日下部家の墓



大雄寺山門



奥の深い町、が率直な感想だ。それだけに一、二度訪れただけでは物足りず、何度も訪れる観光客が少なくない。

こうして今は観光地として潤う高山だが、実は日本でも指折りの百姓一揆が起きた土地でもある。一揆とは、その酷な納税による貧しさに耐え兼ねた農民たちのやむを得ない抵抗である。明和八年（一七七二）から天明十八年（一七八八）までの大原騒動では死罪十三人、流罪十四人、追放十四人、罰金九千九十一人などを出す悲惨な結果となった。四方を山に囲まれた高山は山林や鉱山には恵まれても農作物には十分には恵まれていなかったのである。

同時に高山には、これも日本では屈指の豪商が何軒も軒を並べていた。明治十八年の事件だが、大坂市内の料亭で毎日芸者をあげ豪勇敢財をしている男を警察が怪しみ詰問すると能登の国の泥棒で、飛騨高山の造り酒屋に盗みに入ったという。とはいえ、その盗んだという金額があまりにも多額なので「あんな山の中にある訳がないだろう」というと「いやいやまだまだあったが、待ち出せなかっただけだ」と答えたという話が残っている。

こうした豪商の一軒に日下部家がある。日下部家は高雄寺の檀家だが、現在国指定重要文化財ながら一般公開されている日下部民藝館から高山駅まで、他人の土地を踏まずに行けた豪商だ。岐阜と富山の境から金森城主時代に高山に入った日下部氏は茶の行商から天



高雄寺の隣にある東山白山神社

領幕府代官所の御用商人となり掛屋（銀行）をつとめ、のち両替商となったが、多くの豪商は造り酒屋から始まっているという。

このように一万有余人の未曾有の犠牲者を出した農民と、盗み出せない程の大金を蔵していた豪商とが共存した町。高山祭で曳かれる豪華絢爛な屋台も、こうした農民と豪商の表にでないやり取りが産んだものともいわれている。飛騨高山の歴史を繙くと、なかなか興味深いものがある。

その飛騨高山は織田信長に仕えた大垣の金森長近初代高山城主の手によってその基礎が作られた。

天正十四年（一五八六）八月、飛騨に任ぜられた長近はそれまでの飛騨の中心だった国府ではなく、高山に居城を築くこととし、城下町の整備とともに神社仏閣にも力を注いだ。

なかでも、信長と敵対関係にあった浄土真宗の寺院や門徒には気をつかい、白川郷にあつて勢力をもっていた照蓮寺と誓書を交わし、高山に移転、迎え入れる形をとった。また東山に大雄寺を移転し、後の寺町作りの基礎を築いている。同時に一本杉白山神社をはじめ多くの白山社も再興している。長近は晩年には仏門に帰依するなど、宗教対策に優れていたと同時に神仏に対しても敬虔な気持ちを持っていた。

また長近は各街道の整備、鉱山の開発、山林の整備、農地の確保

高山城跡に残る石垣



昨年秋に開通した安房トンネル



などにも力を入れ、六代続く金森氏の飛騨治政は成功を収め、経済的に大いなる発展を遂げた。しかし逆にその成功によって、金森氏は元禄五年（一六九二）八月に出羽国上山への移封を命じられることになる。そして飛騨高山は江戸幕府の直轄領となったのである。

封建的支配を強めるために直轄地を増やしたい幕府が飛騨高山の鉱山と山林に目をつけたのだが、以来明治維新まで、高山は天領として飛騨国代官（のち郡代）が統治することとなる。

初代代官は関東郡代を兼ねた伊奈半十郎忠篤であった。忠篤は徳川家康が関東に入る時に唯一賛成し、その孫子の代までかかったものの利根川改修など関東の基礎を築いた伊奈忠次の子孫である。この忠篤以後高山は二十五代の郡代を迎えることとなる。そしてその新しい郡代は高山陣屋に居を構えることとなるが、いつも陣屋入りの前日に笠脱ぎ所として大雄寺で一泊するのが習わしといっていたという。

徳川の時代なり浄土宗大雄寺は寺運ますます興隆したようで、念仏の行者であり、その独特の名号（南無阿弥陀仏）で知られる徳本上人が大雄寺に立ち寄られている。文化十三年（一八一六）の夏のこと、十日間滞在した記録が残っていて、境内には日本一大きい上人の名号石が、また寺宝として上人の頭陀袋やお袈裟が残っている。



公開されている日下部民藝館

その五年ほど前の文化八年には高山の浄土真宗寺院が親鸞上人の五百五十回忌を御忌と称したことに、御忌という言葉は法然上人に限り勅命で許された言葉として大雄寺の檀信徒が怒ったという記録もある。同じ浄土真宗でいえば、大雄寺はそのいわば親寺というようなことで東西の確執の仲裁役をしたこともあったという。

また文政十年（一八二七）には知恩院門跡より香莊嚴院の院号と字額を賜り、院家三代と称する華頂宮尊超親王のお弟子が派遣されている。

徳川家の菩提寺が一国一寺となつてからは飛驒での菩提寺となつた大雄寺だが、このような歴史を少しだけだけでもその片鱗が伺える。大雄寺は高山の町の目抜き通りである安川通りの突き当たり

に位置するが、その山門は高山市の重要文化財に指定されている。また寺宝には勅修円光大師行状図絵六幅、観経曼荼羅二幅、山越阿弥陀図、中将姫往相図などがある。

観光地として名を馳せている飛驒高山だが、そこには金森氏の政治の一環として繁栄した飛驒仏教をはじめ、天領の代官・郡代と農民や豪商との歴史など、私たちを魅了するものがたくさんある。

（ルポライタ）



大雄寺の中庭に立つ田中玄了住職

表紙は語る

車窓から

写真と文

川井 聡

月



乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩っていくひとり
ひとりの人生

山陰本線 浜坂〜福知山

兵庫県・京都府

行商列車というのがありました。海岸沿いの小さな港町にひとつずつ停まり、行商の人たちと商品に乗せて、町まで売りに出るのです。

夜明け前に浜坂を出発した列車は、荷物室のついた専用車両がついていました。

蟹や魚、練りもの、干物を詰めたトロ箱がどんどん積み込まれ、車内では足りない商品を交換しあったり、魚を捌いたり喧騒が溢れます。商品の品揃えと荷造り、代金の支払い、と乗車しているわずかな時間の間に、すべてこなさなければなりません。

車内は、さながら魚市場でした。

サカナの匂いがしみついた古い列車も、新型車両に替わって、きつと今頃は、ずいぶん様変わりしたことと思います。

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と温泉をめぐりながら取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

選拔集を
拝む
(二)

連載

須藤隆仙

●机上論と實際論

元祖様が「聖道門を捨てよ」と仰せられたのは、机上論を捨てて實際論に立ちましようというご教示でありましよう。

聖道門というのは、「この娑婆世界の中において四乗の道を修し四乗の果を得るなり」というのが、『選択集』でのご説明であります。ちよつと専門的でむずかしいご説明ですが、四乗の乗とは梵語ヤーナの漢訳語で「乗り物」の意です。現代でいえば、コース(course)のことです。博士コース、修士コースのあのコースです。四乗は声聞乗・縁覚乗・菩薩乗・仏乗の四コースで、声聞は釈尊の声(言葉)を聞いただけで悟るような賢者のことです。縁覚は独覚とも称して師がいなくとも自然現象などを縁として一人で悟(覚)る聖者です。菩薩は自分で悟りの道を進み、さらに人々の教化に努力する仏様に近い人です。仏は悟りを究め、人々を悟らしめる覚者・救

済主であります。これらはすばらしい仏教の人間像でありまして、仏教はそうなることを目指す教えなのですが、しかし元祖様は、「現代のこの世では無理があります」と、ずばりと仰せられたのであります。

机上論でいえば、「そういう人になりましよう」といつておればすむでしょうが、實際論になれば、なかなかそうはいきません。右の四コースはどれも「悟る」ということが第一条件なのです。しかし、この濁りきった末法の世の中で、それが完遂できるかといえ、とてもできそうにもありません。

この世は文字どおり娑婆であります。娑婆とは梵語サハラの音写語でありまして漢訳では堪忍土・忍土などであり、へ堪え忍ばねばならぬ世界」という意味なのであります。そう簡単にものごとが成就されるような世界ではありません。とくに時代が悪くなっております。『阿弥陀經』には「五濁」といって、末法の五つの汚れが教示されております。時代そ

ものの汚れ（劫濁）、人間の見解の汚れ（見濁）、精神的汚れ（煩惱濁）、人間関係の汚れ（衆生濁）、生命そのものの汚れや欠陥（命濁）などであります。前回記したクロン人間の話など、まさにその典型的なものであります。ここを『安樂集』では、大聖を去ることと遙遠（釈尊の）在世から遠く隔たつてしまつてゐる、理は深く解は微（仏教教理は深遠なのに、人々の理解力は乏しい）といつておられるのです。

● 仏を信ずる因縁

そこで、こういった末法の世に通用するのは浄土門（浄土念仏の教え）であると『安樂集』は教えるわけですが、その浄土門をご説明なさるのに元祖様は、中国北魏時代の高僧曇鸞大師の『往生論註』の次のお言葉を引用されておられるのです。「仏を信ずる因縁をもつて、浄土に生ぜんと願すれば、仏の願力に乗じて便ちかの清浄の土に往生する



ことを得」。浄土門というのは、仏様を信ずる因縁によつて極楽浄土を願ひ求め、そこへ生まれさせていただく教えです。というわけです。そしてその極楽浄土で仏になるのであります。

さてその「仏様を信ずる因縁」とはどういうことかと申しますと、浄土宗の七祖と崇められる聖阿上人（室町時代）は、それは「仏語」を信することですと教えておられるのであります。仏語を信ずるとは、つまりお経様を信ずるということでありまして、そのお経様とは、『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』の、いわゆる浄土三部経のことです。以下では仏説の二字を省略して記します。

じつはこの『選択集』は浄土三部経の宣揚書なのであります。それが則ち「浄土宗立教」の根本法典などともいわれる所以なのでもあります。これに関しては後に詳述します。さてその浄土三部経といえは、全経を通して

の要点は、阿弥陀仏のご本願（四十八願）にあるのであり、そのご本願中最も大切なものが第十八願でありまして、これを王本願とも申し上げるわけであります。ですから「仏語を信する」ということは、窮極には第十八願（王本願）を信ずるということなのであります。

第十八願とは、阿弥陀仏の極楽浄土を信じ樂よろこんで、そこに転生したいと願って念仏を称える者は、必ずそれが実現する、という内容のものであります。則ち、願い（信心）と念仏（行）とが具備された宗教の純粹極致であります。

この第十八願について面白い話があります。世に「おはこ」といって得意なもののことを「十八番」といいますが、これは歌舞伎の当り狂言十八番（助六・鳴神など十八の演目）から出た語だとされているのです。ではその「十八」という数はどこからきているかといえますと、なかなか説明ができません。じつはこれは一説に、阿弥陀仏の第十八願に拠つ

たものといわれているのであります。古来から阿弥陀仏の第十八願こそ最も大切なものとされてきた、その名残りのようであります。とにかく、第十八願はそのように仏教の中で大変に大切な教えである。その教えに助けられていくのが、浄土門なわけであります。

●二つの理由

元祖様は、何故に第十八願が願いと念仏（願生と称名）とを内容とされたかについて、それは仏様サイドの話だから簡単には分かりませんとしながら、もし試論が許されるならとして、「勝・劣」と「難・易」との二つの理由を教示しておられます。勝劣とは勝れていることと劣おとっていることとであります。難易は難なんしいことと易やさしいこととであります。

先ず勝劣ですが、浄土往生を願つての称名念仏というものは優れた宗教行であり、それから見れば念仏以外の行は念仏を超えていくものではない、というのであります。ちよつ

と聞きますと、これはいささか我田引水の論ではないかと思われるかも知れませんが、これは決してそうではないのです。

仏教は周知のとおり、仏（真理を悟った人）、法（真理そのもの）、僧（仏が教える真理を守る集団）をその根本要素として三宝というわけでありますが、この三宝を念ずるといふことの大切さが念仏・念法・念僧としてお経様に出てまいります。そしてかの道元禪師が「ねてもさめても三宝をとないたてまつるべし（略）南無婦依仏、南無婦依法、南無婦依僧となえたてまつるべし」（『正法眼蔵・道心』）と教えられたように、三宝を念ずるといふことは仏教徒のつとめでもあります。その三宝の中でとくに上首たるのが仏であることは言をまちません。法仏僧でもなければ僧仏法でもなく、正しく仏法僧の順位なのであります。その念仏のなかで、元祖様がとくに阿弥陀仏のみ名を称える念仏こそ「勝」の義があると仰せられたのは、自ら次のような理



由によると述べておられるのであります。

「名号はこれ万徳の帰する所なり。しかれば則ち、弥陀一仏の所有の四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、皆ことごとく阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。故に名号の功德、最も勝とするなり。余行はしからず。おのおの一隅を守る」（『選択集』・第三章）

則ち、称名念仏というものは、阿弥陀仏という最高の仏の内容が、全部調合された丸薬であるから、これを服用すれば、すべての薬に勝るのだ、というご教示であります。名号（阿弥陀仏の名前）の功德が最勝であるということは、阿弥陀仏という仏様が最勝であるということとあります。元祖様は暗にそのことをいっておられるのであります。ここで、阿弥陀仏が最高・最勝であられるということについて、少し詳しく述べておきましょう。

● 阿弥陀仏は諸仏の王

元祖様が阿弥陀仏のことをもつとも分かり易くご説明されたものに『三部経釈』がございます。『三部経釈』は漢文でお書きになられたものと和文でお書きになられたものとが、ありますが、和文のほうの『三部経釈』でありまして、次のように述べておられます。

「名号をば諸宗おのおのわが宗に釈しいれたり。真言には阿字本不生の義、四十二字を出せり。一切の法は阿字をはなれる事なきがゆえに功德甚深の名号といえり。天台宗には空仮中の三諦、正了縁の三義、法報応の三身如来所有の功德、これを出ざるがゆえに功德莫大なりといえり。かくの如く諸宗おのおのわが存するところの法について阿弥陀の三字を釈せり。いまこの宗の意は、真言の阿字本不生の義も、天台の三諦一理の法も、三論の八不中道の旨も、法相の五重唯識の意も、総じて森羅の万法をひろく摂すとならう。極楽

世界にもれたる法門なきがゆえに。ただし、いま弥陀本願の意は、かくの如く悟れとはあらず。ただ深く信心をいたして称うる者を迎えんとなり」

これは大変なご教示であります。真言宗・天台宗・三論宗・法相宗といった諸宗の奥深い教義から、世の中の万法ごとくまで、みな阿弥陀様の中に包含させられている、極楽世界はそれらの真理を全部内蔵しておられる、というのであります。ただしそれを哲学的に理解するというのではなく、要は信じて南無阿弥陀仏と名号を称えることである。そうすると極楽浄土へ救われていくのです、とこういうご教示であります。

ここでは阿弥陀仏が諸仏の本体としての仏様であるということが説明されているのであります。諸仏の本体でありますから万徳を具えておられるのであり、したがってその名号また万徳が帰するところでもあるわけです。阿弥陀仏が諸仏の本体であるということは、

中国や日本で早くからいわれてきた教えであります。『法華経』などでも、インドに出現された釈尊は権のお婆であって、その奥に本當の本体、久遠の昔からの悟りの生命というものがあのだ、という教えであります。その本体を「久遠本仏」と申し上げるのです。阿彌陀仏こそ正にその久遠本仏であるというのが、『法華経』の哲学に立脚する天台宗の一つの伝統であります。天台宗で彌陀信仰を究められた恵心僧都は、阿彌陀仏が無量寿であるのは『法華経』に説く久遠本仏であるからだとし、阿彌陀仏の名号には万善万徳が具わるのだから、これを称えることこそ大乘善根最も優れた善事であると説かれたのであります（『正修観記』）。元祖様はこの恵心僧都の説を受け継がれて、「名号はこれ万徳の帰する所なり」と仰せられたのであります。

中国で『法華経』による仏教を広められた中国天台初祖智者大師は、著『摩訶止観』に、心を鎮めて悟りを得る方法を説かれ、その一



つの方法として「一仏に想いを集註し、その仏の名を称えよ」と教えられたのでした。ひじょうに貴重な教えですが、残念ながらその一仏というのは何仏であるかを名言されなかったのです。ところが智者大師の後輩で中国天台の六祖を継がれた妙楽大師が『摩訶止観』の註釈書を書かれ、その一仏とは阿彌陀仏ですよ、と教えて下されたのであります。

そのお言葉がまた大変な真実でありまして、『諸経の讚するところ多く彌陀にあり、ゆえに西方をもつて一準となす』（原漢文）というのであります。つまり、「お釈迦様の説かれたお経の多くは、阿彌陀仏を讚えておられるのです。だから阿彌陀仏の西方極樂浄土こそ、私たちが準拠すべき一点なのです」というのであります。何という素晴らしいご指南でありましょうか。さすがは中国天台中興の祖と称された妙楽大師です。仏教のなかで阿彌陀仏こそ最高第一の仏様、諸仏の王であるということをも、明瞭に人々に教えられたわけ

あります。阿弥陀仏とはそのような仏様でありますから、『楞伽經』には「十方諸刹土の衆生菩薩中が所有の法報仏・化身および変化は、みな無量寿極樂界中より出する」と説かれており、多くのお経に、仏国土を説明して「西方極樂國の如し」とあるのであります（『大般泥洹經』その他）善導大師も『觀念法門』に、三世の諸仏はみな阿弥陀仏を念じて成仏すると説いておられます。恵心僧都のお説は前述のとおりでありまして、これらを繼承された元祖様は、諸仏の本体（久遠本仏）、最高第一、諸仏の王、としての阿弥陀仏であればこそ、その名号また阿弥陀仏の万徳が調合された丸薬であり、最勝の義があるとされたのであります。元祖様の教えを直情的に受け継がれた親鸞聖人は、「久遠実成阿弥陀仏、五濁の凡愚をあわれみて、釈迦牟尼仏としめしてぞ、迦耶城には応現する」（『浄土和讃』）とうたわれて、本体（本仏）としての阿弥陀仏が、釈迦

という化身となつてインドに出生されたのだと歡喜されたのであります。ただ、この本仏の説というのは、凡夫の浅はかな知識で解釈すると、仏と同格であるといった自惚となつて念仏をおろそかにするようになるので、元祖様は「悟れとはあらず」と戒められたのです。ですから私たちはこれを信じてお念仏すればよいわけでありまして。（和文『三部經釈』には、どの仏様も悟りの内容とその働きに勝劣はないのだ、と注意しておられます。これは凡夫の本仏解釈へのご心配であられましょう。）

この最高の阿弥陀仏の名号をお称えするご利益は、もちろん極樂往生であります。現世のご利益も甚大です（後述）。『選択集』はまことに奥深い書であります。（つづく）

（法然上人讃仰会理事・函館／称名寺住職）

身障者から学ぶ

連載第二回

小学校への 入学



高木悦男

公立小学校のなかには普通学級のほかに、身障児にもより行き届いた教育を行うため、

身障学級を併設させている学校が数多くある。

しかし「すべての児童は平等に教育を受ける権利を持つ」と主張し、健常児と一緒に教育を希望して、親が支援団体の助けを借り、身障学級への入学を拒否するケースがしばしばある。

ひろただ

洋匡君の母親は、かつて人に誘われてこのような団体の会合に出席したことがあるが、

あまりにも権利に対する主張が強く感じられ、「洋匡には、社会人としてあらゆることに感謝する人間に育ってほしい」という願いを強く持っていたので、その空気になじめず、団体への参加を見合せた経験を持っていた。

障害を抱えた子を持つ親が、突き当たる大きな壁のひとつが、小学校への入学である。

洋匡君の母親はいろいろな情報を集め、父親とも相談して、洋匡君がある私立小学校に受験させた。最初保留の通知を受けたが、結局

は不合格となってしまう。私立小学校の苦悩もわかるような気がする。

その頃世田谷区の学務課では、来年度の新入児童の中に、手足の欠損している子がいるという情報をつかみ、日学務課長を中心にした対応をはじめた。教育相談室では子供との話し合いを、学務課では両親との面接が行われた。

学務課では、当初両親は地元地域の子供と遊ばせたくて、地元のY小学校を希望していたにもかかわらず、面接のときには「学校については、子供にとっていい学校を決めて下さい」という謙虚な態度があり、またしっかりした子育ての方針、「頭と心で社会の役に立つ社会人に育ってほしい」というものを持っているということ、そしてこの団体にも属していないということなどで、日課長は乙武一家に対して大いに好感を持ったそうである。そしてその時に、洋匡君が画いた新幹線の絵と自分の名前を書いたものを置いていったそ

うである。これが後で学務課内でたいへんな話題となった。

「本当に本人が書いたのだろうか」

「どのようにして書くのだろうか」

誰もが驚くほど上手に書いてあったそうである。

次に洋匡君を交えて親子三人での面接が行われた。当日洋匡君はバギーに乗ってきた。そして部屋の前でバギーから下りると、部屋の中には両足を左右に振りながら元気に歩いて入ってきた。椅子を勧めると、両手を使って上手に椅子に座った。居並ぶ大人たちの目は洋匡君の一举一動にくぎづけになってしまった。

面接に入ると、課長の顔をしっかりと見ながら、敬語を交えてハキハキ答える。両親がいろいろが、他の大人たちが見ているようが臆することのない堂々とした態度であったそうである。

「名前を書いて下さい」

と紙を出すと、そばにあった鉛筆を口にくわえ、さらに頬と手にはさんで、大きくしつかりした字を書いた。

H課長は、洋匡君が部屋に入ってからの一連の動作を見て、

「ただ手足が欠けているだけではないか。することは普通の子供とどこが違うのだ、むしろ普通の子供以上ではないか。手足が欠けていても、工夫すれば人間はここまでできるのか。人間のすばらしさを見たようだ」

と後で語っておられた。そしてこのときを機に、学務課の中で身障者に対する見方も変わったと言われているそうである。

教育相談室では、普通学級は無理であるという結論であった。しかしH課長は、

「俺は職をかけても、この子を普通学級に入れてみせる」

とまで言い切ったのである。

学務課の課長の心を、ここまで動かせたのはやはり、乙武親子の人間的魅力、すばらし

さにつきるような気がする。

課長は早速教育長に報告した。

「君がそこまで言い切るのなら、僕は君と行動をともにしよう」

と話がまとまり、許可が下りたのである。

次は、乙武一家の住んでいるY小学校で引き受けてくれるかどうかである。



教育長は校長を呼んで依頼した。校長は教職員にいきさつを充分に伝え、

「学年会で話し合ってもらいたい、次の職員会議で決めよう」

と言われた。区の教育委員会から依頼されたことを断ることが、学校長として恥かしいことであることを知っていた私は、教務主任でもあり、協力を約束した。

ちようど教頭が入院していたこともあり、何とか校長の役に立ちたいと願った。根回しは気づかれればかえって反感をかうので、まずは静観し探りを入れてみた。

若い学年主任の学年では「区として身障学級を設置しているのだから、身障学級を勧めるべきだろう」という声が強い。年輩の学年主任の学年では、「区教委で普通学級でも生活可能という結論を出しているのだから、それを信じよう。学校長の立場も考えなくては」という声が強いことを聞き、どうにかなると判断した。専科の学年からは、保留という声

が聞かれた。

職員会議は臨時に開かれたので、私が議長をかってでた。結果は三学年賛成、三学年反対、専科学年保留ということであつた。私は「お聞きのとおり、賛成、反対同数、保留一です。後、後は校長一任とします」と言つて、下駄を校長に預けた。

一週間後学校長より、

「乙武君を引き受けることにします」と発言があり、この件は終わった。

次は、乙武君が入学するまでの準備にかかつた。設備面では電動車椅子が校内で使えるよう、段差をなくすことであり、便所のひとつを改良した。そして乙武君用の机、椅子を特注した。

公立学校だからできることで、私立小学校の苦悩もわかると書いたのは、一人の障害児を受け入れることによる出費の大きさを考えると、やむを得なかつたと思うのである。

もうひとつは乙武君を誰が担任するかである。小学校では、三月に学校長に第一希望から第三希望まで書いて、担任希望を学校長に提出する。今回は第一希望に一年と書くことは「乙武君を担任してもよい」という意思表示になる。

結果は、私と九月に採用されたO氏の二人であつた。O氏は新任だし、「まだ他に勉強することがあるだろう」ということで、私が乙武君を担任することになった。

私は、「障害者自身の努力は並大抵のものではないし、耐える心の強さと接することが多い。健常者はもつとこの点を見習うべきだ」と常日頃考えていたし、「最近の子は少子化により、弟や妹の世話をするのが少ないから、障害児と接することにより、やさしさや人を思い遣る心を育てられれば」という願いを持っていた。

私の教職生活も定年まであと四年。この四年間乙武君を担任して、今まで考えていたこ

とを、クラスの中で実現できればと考えて、担任を希望したわけである。

さて、乙武夫婦が学務課に最後に呼ばれたのは、三月中旬頃であった。H学務課長からY小学校への就学通知書が手渡されたのである。母親はこれを手にしたとき、人前もはばからずに声を出して泣き出してしまった。課長の態度から普通学級へ入れてもらえそうだとは思っていても、なかなか通知書が出ないまま、不安の日々を送っていたので、通知書を手にしたとき、その感激と感謝の気持ちから涙となって一気に出てしまったのである。

このようにして乙武君のY小学校普通学級への入学が決定した。

乙武夫婦に就学通知表を渡したH課長は、後日Y小学校に御礼に訪れた。

職員の前に挨拶に立ったH課長は、途中で言葉を詰まらせ、涙を拭いた。それほど乙武君を普通学級に入りたい、という意志が強かったであろうし、自分の意志が通った安堵と、Y小学校への感謝の気持ちから、感激となって現れたのであろう。感動的な挨拶であった。

(元公立小学校教諭)

坂野泰巨 編

選択集入門

選択集十六章之図

本書は『選択集』の各章を絵図におこした「選択集十六章之図」(高田敬輔・画)と、各章を適切かつ端的な言葉で解説した堀尾貫務上人による『選択集十六章図略解』の要文を左右の見開きページに配し、『選択集』の大意を知る最良の入門書である。

B5判・上製・本文五六頁(二色刷)・定価 四千円(税込)

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0480

御法語に聴く

たとい決定往生の信心を起こすとも、其の後、又称念する事なく、ならびに小罪なりとも、これを犯じて後懺悔せずば、敢えて往生を遂げたがたく候歟。

【九條兼実の間に答ふる書（其二）】

必ず往生ができるとの信がおきても、それ以後お念仏を称えることなく、また罪を犯しても取るに足らないからといってこれを懺悔しなければ、自ら往生を遂げがたくしているのです。

蜂と懺悔と「やれ打つな」

ある夏の夕暮れ。山から吹き下ろす風が涼しかった。「そうだ、一仕事してしまおう」。墓地の片隅に廃材が積んである。前年、雨戸を修繕しており、ゴミ焼きの焚き付けにでもしようと捨てずにおいた。しばらく放っておいたが、お盆が近づくにつれ見苦しく思えてきたのだ。

角材や板きれをより分け、少し汗ばんできた頃であろうか、背後から蜂の羽音が迫り、私の周りをやたら激しく飛び交う。この時期、灯籠や墓石の中に蜂が巣を掛けることがあるが、それにしてもしつこい。どうしたことかと思っていたが、やがて蜂たちは攻撃を仕掛けてきた。とりあえずこの場を離れよう、そう思っ手にした材木を元に戻した。

と、その途端、手首に痛みが走った。(えっ、まさか)。蜂から目を離さずにいたはずなのに、「なぜ」と思ったが、手元を見ると、軍手と手のひらの間にできた隙間に蜂が入り込んでいる。積まれた廃材の間に蜂の巣があったのだ。材木を持ち上げたとき、巣の周りを陣取っていた蜂たちを刺激してしまったのだろう。これでは刺されて当然だ。

翌日は朝からどしゃ降りだった。手に殺虫剤を持ち、ハチに刺されぬ

よう厚着をして墓地に向いた。材木の隙間からハチの巣を窺い、一氣に殺虫剤を吹きかける。慌てふためく蜂たちだが、臨戦態勢を取ろうにも、羽は雨に濡れて動きが鈍い。蜂は手足を震わせながら力尽き、幼虫はかえることなく命を終えた……。

仕返しをしようと思った訳ではない。突然、巣を暴かれた挙げ句に殲滅の憂き目に遭うなんて、蜂にしてみれば何とも理不尽で殺生な話だ。

やれ打つな 蠅が手をする 足をする

こう詠んだのは小林一茶だが、差詰め私は、突然現れた無慈悲な怪物であつたことだろう。「不殺生戒」なら重々承知している。しかし、お盆を前にして墓地に蜂の巣があると分かつた以上、注意を促すだけですまされるであろうか。蜂は巣に近づく者を攻撃する。刺される可能性は高い。確かに罪なことだけれども殲滅する以外手を思いつかなかった。

懺悔とは「罪を告白して許しを請い、悔い改めること」で、罪悪感を消し去ることが目的だという。が、この夏も蜂を見る度に恐怖と罪悪感が甦る。犯した罪を「懺悔しなければ自ら往生を遂げがたくしている」

というが、罪悪感がある以上、懺悔は終わっていないのだろうか。

ところであまり知られてはいないが、一茶には「蠅が手をする」をモチーフとした句がもう一つある。「やれ打つな」の句は『八番日記』の文政四年六月の稿に収められているが、同書の文政二年五月の稿に

縁の蠅手えんてをするところを打たれけり（腕の蠅とする写本もある）

というのがそれだ。蠅の気持ちになつて「やれ打つな」と詠む二年前、一茶には「打たれけり」と傍観者の立場で句を詠んでいる。同じ題材でも二年の間に彼の視点は正反対になつたのだ。

実は「打たれけり」と詠んだ直後の六月、一茶は長女を亡くしている。二歳にも満たなかった。『おらが春』は娘の死を記した後、「露の世は露の世ながらさりながら」と詠み、置き場のないやるせなさを吐露している。それから二年。「やれ打つな」と詠んだ文政四年六月は、ちょうど娘の三回忌にあたる。ふと蠅の姿が目止まつたのだらう。「手をする」仕草に「打たれけり」と詠んだあの夏が、かわいい娘と過ごしたあの夏が、一茶の瞼まぶたに甦つたのだ。世のはかなさを思うとき、一茶の心は蠅と結ばれ

た。「やれ打つな」とは仏心の発露に違いない。

『「やれ打つな」にしても、傍観者でなく、蠅になりきつての朗詠である。精いっぱい生きたいという小さな生きものの可憐な願いにとけ込んでいる朗詠なのだ』(趣意)。

松原哲明師がこの句をこう評したと、その師僧、松原泰道師の著『般若心経入門』(祥伝社)にあるが、一茶が受け止めた深い悲しみの先に、あらゆる命への慈しみが広がっていたのだろう。

我が身に振り返ろう。一茶のように「仏心」が宿れば、殺生の罪悪感から解放されようが、今、そのような心境にはほど遠い。

ではどうしたらよいか。少なくとも、蜂に刺された痛みと彼らを殲滅した場面の記憶は決して忘れてはならないだろう。なぜならそれが、あの蜂たちがこの世で精いっぱい生きようとした証であるからだ。私は、その証を御仏のもとに伝え届けてはじめて「罪を告白し、本当の許しが請える」と思えるのだ。だとしたらこの罪に限らず、私の往生なくして私の懺悔は終わらない。今はそう思うことにおこう。

記 時 歳 教 仏

昭和20年8月15日、日本はポツダム宣言を無条件に受諾し、天皇はラジオを通じて太平洋戦争終戦の宣言を国民に伝えられた。爾来、この日を「終戦記念日」として各地で各種の催しが行われるようになった。

終戦日妻子入れむと風呂洗う

秋元不死男

しみじみとした思いのある句です。いまでも、この日の昼食にあえて必ず「すいとん」を食

べて苦しかった時代を思いだすお家があるようです。

忘れてならないことといえばこの15日の少し前、6日に広島市に世界最初の原子力爆弾が落とされました。人命の喪失12万、続いて9日、長崎市にも投下されました。この未曾有の惨害を決して忘れてはなりません。

原爆忌市電無数の手を吊りて

今井 勲

戦後日本の著しい復興のなか

終戦記念日

で、ともすれば風化しそうになる戦争の記憶。それを一種の超現実的ともいえる光景を詠むことによつてとどめておこうとする一句。暑い夏、長い夏が見事に表現されています。

八月の杉の厚さよ父眠る

安斎千冬子

静かな夏、八月。私たちにとつての盂蘭盆会は、鎮魂の季節です。遠く長い時間を思いながら——南無阿弥陀仏。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

〒615 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八
FAX〇七五—三一五—三七五三

無明抄

心静かな

秦恒平

4

いま世間を一人歩きして、これはあんまり呑気過ぎないかと思われる相手に、「心」がある。「心」を持出してさえおけば、善玉で意味深長で頼りありげに高等だと謂わんばかり、新聞雑誌も、テレビもラジオも、「心」のページや番組を必需品のように抱き込んでいる。なんとも「心よげ」に「心ある」「心暖まる」ようだけれど、さて、そんなにも心は、頼れるか。

つい先日、群馬県前橋の県立図書館まで出向いて、「心は、頼れるか」という題で話してきた。この題一つを読んで、心が頼れないで、どうして日々まともに暮らして行けるものかと考えておいでの方が、幾らか多いかもしれないが、まこと我も人も共に、心ほど「心もとない」ものは無いなあと、「ほぞを噛む」思いで痛感されている方も、決して少なくはあるまい。

ところで、いま「ほぞを噛む」という言葉を使った。膺は、噛もうにも噛めない。つまり後悔しても及ばない。本当に膺を噛むわけではない。私は、この種の言葉を「からだ言葉」と命名し、以前に『からだ言葉の本』（筑摩書房）を出し辞典も添えたことがある。例えば、「頭が痛い」「骨を折る」という、事実骨折した頭痛がするのを「からだ言葉」とは言わない。頭痛が無くて「頭痛鉢巻」とか「頭が痛いよ」とぼやき、骨は折れていなくても、「骨を折ったのに。骨折り損だ」などという場合は「からだ言葉」になる。

人体各部の名称からは夥しい「からだ言葉」が湧いて出たように出来ている。「目が届く」

「鼻が高い」「口はばつたい」「一枚舌」「歯向かう」「耳ざわり」「眉をひそめる」「唇さむし」「首にする」「顔が利く」「面の皮が厚い」「額を寄せて」「頭越し」「頬かむり」「喉もと過ぎれば」「顎を出す」「目くそ鼻くそを笑う」「唾をかける」「空涙などと、およそ首から上だけでなく何百とある。首から下へも「胸三寸」「腹芸」「肩で風を切る」「乳くさい」「手が利く」「足が早い」「及び腰」などと、仰天するほど「からだ言葉」は生まれ出でいて、ことに「手」には、千にも及ぶ「からだ言葉」が、まるで生え出ている。「頭」と「目」にも、たいへん多い。

私は、日本人の「からだ」感覚や「からだ」認識を調べるのに、こういう「からだ言葉」の丁寧な検討が抜け落ちていては、たいへんな「手ぬかり」なのではないかと、ずっと主張してきた。「からだ言葉」の特徴は、少なくとも二つある。体じゅうで「からだ言葉」を生まない部位が無いという事実。無数に有るのに、意味の分からない表現が殆ど無いという事実。いつの間にかに知って、使って、ずいぶん便利をしている。もう一つ、あんまり気持ちいい意味の「からだ言葉」が少なく、どれも辛辣な批評味を帯びている事実。この事実をうまく説明するだけでも、日本人の、「からだ」についての感じ方・考え方の、大事な要点が見えて来るのではないか。「ことば」とは暮しの現場を流れる血液のようなものであり、「からだ言葉」ほど、多用し、慣用されている材料を、もっと大切に「日本人」理解に、利用し活用してもらえば、あまり観念的な、ややっこしい「からだ」論から、より有益な実体論の方向へ、転じ得るかも知れないと、久しく、私は考えて来た。

その「からだ」といつも一對・対極に在ると思われている「心」だが、「心は、頼れるか……」だが、「心もとない」のではないか。

「心もとない……」即ち「心は、頼れない」意味を謂う言葉では、ない。だが「心細い」「心丈夫とはいえない」意味である以上、「心頼みにてきない」ことになり、回り回れば、やっぱり「心は頼れない」というのに近い意味合いを持つて来る。詭弁でも何でもない。事実である。だが、現に「心丈夫」「心強い」という物言い……もある。「心頼み」というのも、要するに「頼もしい心」を感じさせる。私は、こういう「心」のさまざまな、いろいろな状態を、これまた無数に表現している日本語に注目してきた。ひとまとめに「こころ言葉」と呼んで、これも辞典にまとめたり書いたりして来た。こういう「こころ言葉」の数々を、具体的に把握し、理解して、日本人の「心」観……「心」をどう把握し、どう考え、「心」とどう付き合つて来たかを、より具体的・実際的・生活社会的に考察してもらう必要があるのではないかと提唱して来た。

「心」つて、何？ 突然そう聞かれてとつさに答えられる人が、そう大勢は有るまい。ゆつくり思案をしてみてもなかなか「とりとめない」のが、どうも「心」である。これかと思つと、あれになる。そうかと思つとそうではなくなる。

いま「心静か」であつたのが、ふつと「心が騒ぎ」「心が乱れ」「心は千々に砕け」て「心ここにあらず」の有様だ。いとも「心丈夫」な「猛き心」「強い心」で「心堅固」に「心弾んで」いた積もりなのに、一瞬にして「心弱く」「心細く」「心沈んで」しまい、ついには「心

が病」んだり「心狂氣」したりする。「明るい心」が「暗い心地」になる。むろん、これと真つ逆様にもなり得る。「清い心」の人だと思っていたのに、じつは「きたない心」だったと分かったり、「心安い」と「安心」していたのに「心変わり」して、裏切ったり、裏切られたりする。「心」というヤツ、なかなか「とらえどころ」無く、現に真つ逆様にいろいろな「こころ言葉」が、心の「とらえどころ無さ」を雄弁に証言して、余りある。その「とらえどころの無い心」をどうか「把握」したい、把握した気になってみたければこそ「こころ言葉」が、いろいろな意味、いろいろな面て必要になったのだらう。

現に、われわれは、在る筈の無いものを、敢えて在るかのように、「心」に、いろいろな性質を付け加えて説明して来た。具体的な、余りに具体的な、例えば色や、形や、構造や、行為を付け加え、表現して来た。例えば「心構え」というように、「身構え」に同じ姿勢を心にもとらせている。構造的な「構え」まで持たせている。「心」には、「内」も「外」も、「奥」も「底」も、「隅」も、在ると見て来た。「心根」という根があつて、根は深い「心の闇」に通じ、闇の中には「心の鬼」までが棲んでいると考えて来た。

「心掛ける」ことも「心を尽くす」ことも「心を残す」ことも「心を宥める」ことも「心を見る」ことも「心をやる」ことも「心を通わせる」ことも出来るし、「心を休める」ことも「心を隠す」ことも「心に秘める」ことも出来る。「熱く」もなり「寒く」もなり「冷え」もし、「心温かな」こともある。いったい、どれが「心」のほんとうの在り様かというのと、とても、どっちかへ、またどれか一つへ、決めてしまえるものではない。

さらに「気」や、「情」「精」「神」「霊」「魂」「モノ」などに熟した「こころ言葉」まで拾って行くと、まざまざと、われわれの「心」の複雑さが、まさに「心の襞」かのように、夥しくも、目に見えて来るのである。「無心の境地」を貴いというが、また「無心」といえば金品を人にせがむ意味にも日本人は用いてきたではないか。「心」を、強いて定義づけようというのが、もともと無理なのだ。「心」とは、「心定まらない」もの、どうにでも変わってしまうものの、「不動心」「無心」「心不乱」のときも、「大きい心」「広い心」でも有り得るけれど、これが一瞬に揺れて騒いで「心ここにない」「あやふやな心」「頼り無い心」に、「狭い心」「小さい心」に、ぐらぐらと変わってしまう。変わり易いこと自体が「心」というものであり、一定ではなく不定のものと考えた方が当たっていると、そう考えた方が分かりが早いのだ。

むろん修行や修養で「心を磨き」「心を鍛える」ことの出来た立派な実例は、古来多かった。だがなまなかの「心根」「心掛け」では出来ない。ただもう悩ましいのが「人の心の持ちよう」だということになる。「心」という一字・一語を掲げさえすれば、貴い、美しい、気高い、ご利益ありげな……もの・こと……かのように、新聞、雑誌が「心のページ」を持ち、特集し、まさに氾濫しているが、どれほど、効果が上がっているか。

「心」に対し、固定観念を以てまるで「信心」してみても、それは、どこかで間違ってくる。仏教では、人の「心」は、迷いの根源^{ねん}としてしている。「心」も、「愛」も、どっちかといえど人を迷惑に陥れる、難儀なものの方に数えあげている。「心を落とさない」という言

い方で、人間の自我（エゴ）に警告を発している人もいた。心は頼れるか、は、正しい問いではなかった。自分の心は、静かであるかと問うのが本筋なのだ。

中国古代の荀子の「心の説」では、心は森羅万象に関わり得るが、また只一つの事に集中できるといい、また無尽蔵に蓄え得るが、また一瞬に虚に返せるといい、しかも心の芯の一点は実に深い「静」を湛えて揺るがないと謂っている。「虚」「壹」「静」の説である。この最も大切な「静」に関わって人の心の不安を抉った作品が、あの夏目漱石の『心』であった。「静さん」という作中「先生の奥さん」の名は、深い深い意義を持っていた。あの「先生」は、「静かな心」が十分に保てなくて自殺しなければならなかった。「幸福であるべき一対の（不幸な）男女」であったことを証してあまり在る「心」の悲劇だった。

はた こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこもりの湖（うみ）」「冬祭り」「京都感覚」「蘆山」「死なれて・死なせて」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

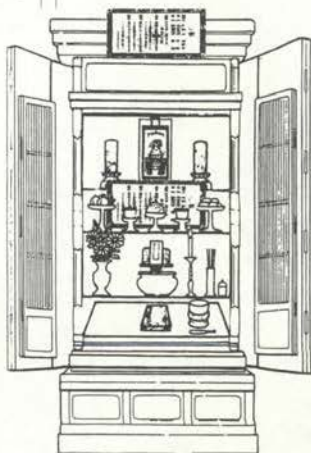
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

舞見お中夏 すまげし申

平成十年〈夏〉

總本山知恩院門跡第八十六世
浄土門主

中村康隆

大本山増上寺
法主

藤堂恭俊

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山光明寺
法主

戸松啓真

大本山善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

平成大事業勸募懇請中
御影堂屋根替大修理
阿弥陀堂新築再建

美作 誕生寺

〒700-0002 岡山県久米郡久米南町里方808
TEL. FAX (08667) 2812102

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154-0007 世田谷区世田谷四-七-九
大吉寺

浄土宗教学局長

袖山榮真

〒380-0845 長野市西後町一五六八
十念寺

浄土宗大願寺住職
浄土宗議會議員

神谷英敏

〒042-0922 北海道函館市銭亀町101

清水湊 貝付昆沙門天

忠高山 實相寺

浄土宗九品院住職
浄土宗議會議員

小田義海

〒857-1165
佐世保市大和町一八八—一

大松寺

住職 酒井亮貫

〒108-0073 東京都港区三田四—一三八
電話(〇三三)三四五一、二四九四

大正大学

理事長 大田秀三

〒370-0053 高崎市通町90
〇二七三三三四〇〇〇

京都文教短期大学

学長 伊藤唯真

〒611-0041 京都府宇治市横島町八〇番地
(〇七七四)二一四一〇一

天光院住職

真野龍海

〒105-0011 港区芝公園一—三三六
〇三三四三一、一二三三八

淑徳大学・淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174-8645 東京都板橋区前野町五—五十一

舞見お中夏 申し上げます

平成十年〈夏〉

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03(3404)8447
ホームページアドレス
<http://baisouin.or.jp>

愚鈍院
住職

中村真道

〒984-0051 仙台市若林区新寺三十二-二十七
電話 〇二二-二五六六〇五七

函館
称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八-十四
電話 〇一二八-〇三三〇五七四

明顕山 祐天寺

住職 本多正雄
副住職 巖谷勝正

〒153-0061 東京都目黒区中目黒五十二-四十五三
電話 〇三三-三七二一〇八九

神奈川教区教区長

清水厳矩

〒248-0013 鎌倉市材木座六十七-七十九
大本山 光明寺中

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254-0006 平塚市立野町六一五
電話 〇四六三-〇三二二二六三八

常光寺住職
淑徳学園校長

大谷壽雄

〒141-0021 品川区上大崎一十二-三十
電話 〇三三-〇三四四一四九三二

東京教区教区長
光取寺住職

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一十五-十
電話 〇三三-〇三四四一八二八四

平成十年〈夏〉

〒142-0002 東京都文京区小石川三丁目
十四番六号

無量山
傳通院

電話(〇三)三八一四三七〇一(代表)
振替東京六〇九三番

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒245-0016 鎌倉市長谷四丁目二八
電話(〇四六七)一二一〇七〇三
FAX(〇四六七)二二五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四丁目二一八

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二丁目一五

横浜 大光院

宮林昭彦

勝願寺

〒350-0033 埼玉県鴻巣市本町八丁目三十三

お寺は生きているうちに行くところ
ナムアミダブツのお寺

住職 樋口隆信
副住職 樋口伸生

〒980-0834 宮城県石巻市門脇町二十五丁目四光寺
電話(〇二二五)一二二一・一二六四

浄土俳壇

青きレモン三ツ実りて書く便り

のうぜん花鮮かに咲きしままボトリ落つ

山本美代子（姫路市）

やませ寒津軽三味線聴きおれば

郭公やわれも早起き露天の湯

佐藤雅子（山市）

大石に鑿打ち込む凌霄花

燈台のもつともらしき夏怒濤

兒玉仁良（入間市）

『浄土』誌上句会開催

季題

墓参

(「ぼさん」の読みも可)

鶏頭

稲妻

×切・八月二十五日

発表・『浄土』十月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

●いずれの題とも何句出しても可

●特選・佳作——賞品贈呈

応募方法

葉書に俳句(何句でも可)を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

アぱずる

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいをさがし

答えは55ページにあります。

5、6月号の答えは「センチャク」でした。応募総数78通のなかから栄えある当選者は次ぎの方です。
 群馬・岡田恵子 岩手・金田秀男
 宮城・庄司まゆみ 福島・渡部祥子
 奈良・四方遵（敬称略）

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

毎号、ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM（浄土の広場）」。俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でどんどん応募下さい。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内。

2 俳句・短歌・川柳など：四首まで。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見や感想など：適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

●新規会員紹介

一般会員

東京 江東組 寿光院

購読会員

北海道 余市郡 富岡啓子

青森 弘南組 来迎寺

和歌山 有田市 法蔵寺

大阪 相阪組 見性寺

神奈川 青葉区 田中次郎左衛門

大阪 高石市 奥村照真

東京 世田谷区 早川盛久

東京 小平市 矢野隆雲



澄みわたる空の高さや盆の月

岱潤

お盆の季節、今年新盆を迎える人のことを考えていたら、ロック歌手のhideの葬儀のようが書かれた新聞記事が目に入った。

五月初旬に築地の本願寺で行われた葬儀に前代未聞の五万人を越すファンが弔問に訪れ、その誰もが涙にくれる姿は、今までの芸能人の葬儀の模様とは異なり、ファン層が極めて若いだけに、私たちにも大きな驚きとなった。

その葬儀に関する感想として、浄土真宗の方の書かれた文章を読んでいたら、「私たちは『冥福を祈る』という言葉は使いません。元々真宗の教えそのものがそういう考えた方をしませんから」とあり、余りに唐突に出てきた表現で、少々驚いてしまった。

その方はテレビのレポーターなどが常套句として使う、「ご冥福をお祈りします」という言葉がおざなりで心がこもっていないことを言っておられるのだが、「我々は冥福など祈りません」というふうに関心、そんな乱暴など私などは思ってしまう。確かに往生した先はお浄土であり、冥土ではない。「冥」という字は暗闇を意味し、お浄土のイメージとは程遠い。しかし一般的には死後の世界を冥土と言っていることでもあり、多少の妥協は必要だと思う。少なくともその時点で、死後の世界を信じたいと思う多くの人々がいたことは事実だし、そう信じるのが唯一の救いと思える状況があったからこそ言葉であらう。今は教育的なことよりもその心を大事にしたい。

(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一

石上俊教
佐上哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十四巻八月号 価額六千円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成十年七月二十五日
発行——平成十年八月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所——株式会社 シータイイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六
振替〇〇一八〇一八二一八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できた。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上がり。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が聞こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo:シーマ41ℓV ボディカラー:ダークブルー・イッシュブラックマートーン(P)・(S4S9:特別塗装色)本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえ、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①

●ご協力をお願い。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社